

## Hui-Wen, CHIEN (簡卉雯) Ph.D

姓名	簡卉雯 CHIEN, Hui-Wen
職稱	副教授 Associate Professor
學歷 Education	日本東北大學 大學院國際文化研究科 博士 Ph.D.in Graduate School of International Cultural Studies, Tohoku University, Japan.
E-mail	hwnchien@ntou.edu.tw
授課領域	日文(一) ~ 日文(六)
研究專長 Research Interests	第二語言習得、日語教育、日本語學、語料庫語言學、應用語言學 Second Language Acquisition, Japanese Education, Japanese Linguistics, Corpus Linguistics, Applied Linguistics
主要經歷	國立臺灣海洋大學研究發展處學術發展組 組長(2018.08.01 ~ 2020.07.31) 日本東北大學大學院國際文化研究科 專門研究員 (2010.05.01 ~ 2010.07.31)

### A. 期刊論文

1. 簡卉雯 & 中村涉 (2009) 「中国語母語話者による「動詞+テイル」の習得に関する事例研究 - コレスポネンス分析による解析 - 」 『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第4号,69-79,(日本)東北大学高等教育開発推進センター.

2. 簡卉雯 & 中村涉 (2010) 「『ている』の習得過程に関する事例研究「難易度を左右する要因を中心に」」 『国際文化研究』第 16 号, 45-56, (日本)東北大学国際文化学会.
3. 簡卉雯 & 中村涉 (2010) 「台湾人日本語学習者の「ている」の習得に関する縦断研究「結果の状態」の用法を中心に」 『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第 5 号, 83-92, (日本)東北大学高等教育開発推進センター.
4. CHIEN, Hui-Wen & Wataru Nakamura (2010). The Acquisition of Japanese Aspect Marker *-te i-(ru)* by Mandarin Chinese Speakers: A Cross-Sectional Study. In M. Hirakawa et al.(Eds.), *Studies in Language Science, (9)*. 127-142. The Japanese Society for Language Sciences.
5. 簡卉雯 (2012) 「動詞の意味特徴からみる「ている」の「結果の状態」用法の習得「縦断的事例研究」」 『日本語/日本語教育研究』第 3 号, 245-259, (日本)日本語/日本語教育研究会.
6. 簡卉雯 (2014) 「日本語パーフェクト用法のシテイルの使用「中国語母語話者と日本語母語話者の比較を通して」」 『東吳外語学報』, 第 38 期, 83-103, 東吳大學外語學院.
7. 簡卉雯 (2015) 「文法性判断テストによる日本語学習者のシテイルの習得研究—「結果の状態」用法を中心に—」 『国際文化研究』第 21 号, 31-43, (日本)東北大学国際文化学会.
8. 簡卉雯 (2016) 「テイルの「経験・記録」用法の習得—「わがこと」と「ひとごと」の側面から—」 『国際文化研究』第 22 号, 127-140, (日本)東北大学国際文化学会.
9. 簡卉雯 (2018) 「日本語学習者の発話における『てしまう』の使用実態：日本語母語話者と比較」, *Learner Corpus Studies in Asia and the World, (3)*. 177-187, (日本)神戸大学国際コミュニケーションセンター.

10. 簡卉雯 (2019) 「母語の違いから見たテシマウの習得プロセス」 『台湾日語教育學報』 第 33 號, 台灣日語教育學會.

11. 簡卉雯(2020) 「テシマウの習得プロセスに関する縦断研究「タクスの違いから」」 『台湾語教育學報』 第 34 号, 50-75, 台灣日語教育學會.

## B. 專書論文

1. 簡卉雯(2011) 「中国語母語話者による日本語アスペクト形式「ている」の習得 - 「結果の状態」用法を中心に - 」 修剛・李運博(編) 『跨文化交际中的日语教育研究：異文化コミュニケーションのための日本語教育』, 2, 378-379, 中国北京・高等教育出版社.

2. 簡卉雯(2012) 「「ている」の「パーフェクト」用法の習得：非現実性を中心に」 笹原健・野瀬昌彦(編) 『日本語と X 語の対照 2 - 外国語の眼鏡をとおして見る日本語 - 』, 23-33, 名古屋：三恵社.

## C. 專書著作

1. 簡卉雯(2014) 『日本語学習者による「ている」のパーフェクト用法の習得』 台北：致良出版社

## D. 學位論文

1. 簡卉雯(2009) 『日本語アスペクト形式「ている」の習得過程の中間言語分析「中国語母語話者を対象に」』 日本東北大学博士論文

## E. 研討會論文

1. 簡卉雯 & 中村涉 (2007) 「中国語母語話者によるアスペクト形式「テイル」の習得過程：ロジスティック回帰分析を用いて」 『言語科学会第 9 回年次国際大会予稿集』, 35-38. (於日本・宮城学院女子大学)

2. 簡卉雯 & 中村涉 (2008) 「日本語学習者の作文における「動詞+テイル」構文の意味タイプと使用頻度：コレスポネンス分析による解析」『社会言語科学会第 22 回大会発表論文集』,32-35. (於日本・愛知大学)
3. 簡卉雯 & 中村涉 (2009) 「テイルの「結果の状態」用法の習得—中国語母語話者を対象に—」『社会言語科学会第 24 回大会発表論文集』,66-69. (於日本・京都大学)
4. 簡卉雯 (2009) 「中間言語の変異性—「結果の状態」用法の「ている」の習得過程に関する縦断研究—」『2009 年度日本語教育学会秋季大会発表予稿集』, 105-110. (於日本・九州大学)
5. 簡卉雯 (2010) 「縦断的な作文データに基づく「結果の状態」用法の「ている」の習得研究—位置変化動詞と状態変化動詞から—」『第 21 回第二言語習得研究会全国大会予稿集』,38-43. (於日本・麗澤大学)
6. 簡卉雯 (2011) 「中国語母語話者による日本語アスペクト形式「ている」の習得 - 「結果の状態」用法を中心に - 」『2011 世界日本語教育大会』 (於中国・天津外国語大学)
7. 簡卉雯 (2011) 「文法テストによる日本語アスペクト形式「ている」の習得」『The 2nd Symposium on Contrastive Linguistics』 (於日本・麗澤大学)
8. 簡卉雯 (2012) 「日本語学習者のパーフェクト用法の習得—シタとシテイルを中心に—」『2012 年日本語教育国際研究大会予稿集』,第 2 分冊, 278. (於日本・名古屋大学)
9. 簡卉雯 (2013) 「パーフェクト用法の「ている」の使用における母語の影響について—中国語・韓国語・英語母語話者を対象に—」『2012(平成 24) 年度日本語教育学会研究集会第 10 回関西地区予稿集』,13-16. (於日本・甲南大学)

10. 簡卉雯 (2013) 「第 2 言語としての「ている」のパーフェクト用法の習得」ロジスティック回帰分析を用いて」 『2013 (平成 25)年度日本語教育学会秋季大会発表予稿集』,260-265.(於日本・関西外国語大学)
11. 簡卉雯 (2013) 「日本語学習者の発話における「ている」のパーフェクト用法の使用特徴」 『2013(平成 25)年度日本語教育学会研究集会第 8 回東北地区予稿集』,15-20. (於日本・東北大学)
12. 簡卉雯 (2015) 「日本語学習者によるテイルの「効力持続」用法の習得」 『2015(平成 27)年度日本語教育学会研究集会第 4 回北海道地区予稿集』,16-21. (於日本・北海道教育大学函館校)
13. 簡卉雯 (2015) 「母語の違いから見た「ている」のパーフェクト用法の習得」 『言語と教育研究 - 応用への道を探る ワークショップ - 』 (於日本・東北大学)
14. 簡卉雯 (2017) 「日本語学習者による補助動詞「てしまう」の習得」 『第 3 回アジア圏学習者コーパス国際シンポジウム』,31-34. (於日本・神戸大学)
15. 簡卉雯 (2018) 「談話の構造から見た日本語学習者の補助動詞「～てしまう」の使用」日本語母語話者と比較」,28. 『日本第二言語習得学会第 18 回年次大会』,28. (於日本・学習院大学)
16. 簡卉雯 (2018) 「日本語学習者の発話における補助動詞「～てしまう」の使用特徴」談話の構造を中心に」 『社会言語科学会第 42 回研究大会発表論文集』,185-188. (於日本・広島大学)
17. CHIEN, Hui-Wen (2019) A Longitudinal Study of the Acquisition of Japanese Subsidiary Verb - *te simau* by Taiwanese L2 Learners: From the Viewpoint of the Pragmatic

Functions. *Japanese Studies Association of Australia Biennial*

*Conference 2019.* (@ Monash University, Caulfield, Victoria, Australia)

18. 簡卉雯 (2020) 「書く」と「話す」課題の違いから見たテシマウ習得過程の中間言語の変異性「縦断的なデータを用いて」『2020年度日本語教育学会春季大会』, 149 -154. (於日本)